

自己愛の社会心理学的研究

堀内 愛子^{*1}・齋藤 勇^{*2}

Social Psychological Study of Narcissism

HORIUCHI Aiko and SAITO Isamu

Abstract

Recently, in the field of Clinical Psychology, it is often reported that the narcissism has been changing its nature from “the state of self-love” to “the state of loving oneself who is loved by others”. This statistical study aims to re-confirm such a change and analyze a relationship between the narcissistic personality and the self-esteem. As a measurement of narcissistic personality, NPI -35, which was developed by Konishi et al., is used. For the measurement of self-esteem, a combined scale based on Self-Esteem Inventory (SEI) by Rosenberg and SE-I by Cheek and Buss is used. These two scales were administered to 133 undergraduates. The results show that the “praise of body” factor is not statistically significant, whereas “very good esteem” has strong positive correlation with the narcissism, which is consistent with the recent findings in the clinical psychology. It also suggests that the “good enough self-esteem” alone does not satisfy one’s narcissism.

[Keywords] narcissism, self-esteem, self-evaluation

問題提起

自己愛は特殊なものではない。親の無条件に受容する養育により、幼児期から育まれていくパーソナリティ要因の一つであり、ゆえに、全ての人に備わっているものである。小此木 (1992) は E. Fromm の言葉を引き、自己愛を「自分で自分を愛すること」と定義した。自己愛に関する研究は、20世紀初頭から各分野において数多く行われているが、近年、臨床心理学の分野から「自分で自分を愛する状態が自己愛と考えられてきたが、今のナルシズム論は、相手の気持ちや感情が自分に向かってくることが重視されることであり、人に愛されたいという方向性に变化してきている」との報告がなされた (和田, 2002)。この報告からは、本来の「自分で自分を愛する状態」が、「他者に愛される自分を愛する状態」に変化しつつある可能性を読み取ることが出来よう。実際の生活の中で、自己愛にとって他者という存在がどれほど重要なものとなっているのか、そしてその結果として、自己愛の本質がどのような変化の過程にあるのか、再度検討を加える必要があるのではないだろうか。

1. 自己愛についての先行研究

自己愛理論の研究は、自己愛を「自我に対するリビドーの備給」つまり「性的エネルギーであるリビドーを外部対象にではなく自分に向けること」と定義した Freud (1914) に始まった。Freud (1914) は、自己愛はあくまでも健全な人間関係である対象愛に至る中間段階であり、人間の正常な精神的発達の上克服されるべき過程であるとする理論を展開している。この理論は多くの研究者によって議論され、後に、自己愛の病理性を主張する Kernberg と、自己愛の健全性を主張する Kohut に代表される形となった。特に、Kohut は Freud の自己愛定義に対し、自己愛が自分に向

* 1 立正大学大学院心理学研究科心理学専攻博士課程

* 2 立正大学心理学部教授

かうだけでなく、自分が生きている感覚や満たされている感覚を、自己対象である相手からの愛によって実感することの重要性に注目している(中村, 2004)。臨床場面に基づいた臨床心理学的な先行研究では、多くの研究者によって自己愛を二つに分類する議論がなされ、その結果、各人のタイプには以下のような共通点が見出された。

まず、「自己中心型」(Broucek, 1982)、「厚皮的」(Rosenfeld, 1987)、「無関心型」(Gabbard, 1989)、「理想自己」(岡野, 1998)、「自己愛顕現タイプ」(Wink, 1991)は、いずれも誇大的、自己中心的で、他者の反応にあまり関心を示さないといい特徴を持っている。これに対し、「解離型」(Broucek, 1982)、「薄皮的」(Rosenfeld, 1987)、「過敏型」(Gabbard, 1989)、「恥ずべき自己」(岡野, 1998)、「自己愛潜伏タイプ」(Wink, 1991)は、いずれも抑制的で引きこもりやすく、他者の評価や反応に敏感であるという特徴を持っている。そしてこの2種類の自己愛は、それぞれが独立した特性としてではなく、自己愛の中の2つの極と見做されることが示唆された(Gabbard, 1994)。またGabbard (1989)と岡野 (1998)は、どちらのタイプも自己評価を維持しようと試みていると述べている。結果として自己愛は、2つの極がそれぞれに、過剰な自己評価による誇大な自己と傷つきやすい脆弱な自己を形成し、誇大な自己が脆弱な自己を防衛する形をとるようになった。(Kernberg, 1975; Kohut, 1971, 1984; 小此木, 1992)。現在では、アメリカ精神医学学会が作成した「精神疾患の診断・統計マニュアル (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: 以降 DSM)」の自己愛人格障害基準を軸として、自己愛人格傾向は、精神医学や臨床心理学の現場を中心に研究が重ねられている。非臨床の分野では、この基準をもとに、Raskin & Hall (1979)が自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory: 以降 NPI) を作成したことにより、普通の人々の自己愛人格傾向の測定が可能となり、より広い分野での自己愛特性の研究が行われるようになった。このNPIをもとに、日本でも多くの研究者によって日本独特のNPIが開発され(小西・大川・橋本, 2006; 宮下・上地, 1985; 大石・福田・篠置, 1987; 小塩, 1998; 佐方, 1986)、これを使用して自己愛者の心理を取り上げ、自己愛者が他者に対して抱く関心や態度の特徴から、その背後にある心理的要因を明らかにすることを目的とした分析や研究が行なわれている。

2. 自己愛と自尊感情との関係

自己愛には、Gabbard (1989)や岡野 (1998)が特徴として述べている「自己評価を維持しようとする働き」があり、自己評価は自尊感情と結びついている。自尊感情尺度を作成したRosenberg (1965)は、自尊感情には、自分を優越性 (superiority) や完全性 (perfection) の感情を含んで「とても良い (very good)」と考える側面と、例えば平均的な人間であったとしても自分が設定した価値基準に照らして自分を受容 (self-acceptance) し、好意を抱き (self-liking)、尊重 (self-respect) して「これでよい (good enough)」と考える側面があると指摘し、自尊感情に二つの意味を与えた(遠藤由美, 1992)。なお彼自身は、優越性や完全性を含まない「これでよい」を自尊心とみなしている。更にRosenberg (1965)は、自分のために自分で設定した個人内基準による判断が「これでよい」という自尊感情と結びつき、その人が所属している社会・文化の中で広く認められている社会的基準による判断が「とてもよい」という自尊感情と結びついている、と指摘する。これに従うならば、「これでよい」という自尊感情の基準は完全に個人の中にあり、「とてもよい」という自尊感情の基準は、その人なりの個人内基準に加えて、常に他者との比較の中で自分の優越性を感じ、また他者からもそのように評価されていることの確認を持続的に必要とする。そのためには、他者と共有している社会的基準において、肯定的判断をされることが重要なのである(遠藤由美, 1992)。

大淵 (2003)は、自己愛心理の構造という点から自己愛と自尊心の関係に言及し、自尊心を自己愛心理の中核的存在であるととらえた。そして、自己愛はその自尊心を中心として、自己愛者の本質的欲求から派生する5つの心理、即ち、自尊心と特に強く関わる自己評価としての自意識、表現としての自己顕示、自己愛から派生した自己中心性、自己関心、自益的認知によって形成されていると述べ、特に自己評価としての自意識に注目している。そして、自尊心による自己評価感情の形成について、「個人の自尊心に直結した重要な属性に関して、他者から否定的な情報を与えられると自尊心は傷つく。しかしながら、他者評価の積み重ねがあると強固な自己評価が形成され、多少の批判を受けても自尊心が揺らぐことはない。自己評価全てが他者からの評価や社会的評価に依存する訳ではないが、社会的評価を全く得られない中で自尊心を維持することは難しい。少なくとも、自尊心と自己評価は一定の社会的評価を必要とし、それに確かに立脚している時に安定するものである。社会的評価とは、必ずしも目に見える業績などである必要はなく、人間関係の中で受け入れられたり支持されるということがそれにあたる。」と解説している。つまり自尊心は、肯定的な社会的評

価とその結果としての自分を価値あるものとする感覚によって、全体的な自己を確立させ、信頼に足る安定した存在へと導いていく上で大切な感情であり、自己愛の成長に関係があると言えよう。このことから、前述した Rosenberg (1965) による個人内基準の「これでよい」と社会的基準の「とてもよい」の2つの自尊感情のうち、Rosenberg 自身の述べる優越性、完全性を含まない「これでよい」のみを自尊心とする見解では不完全と言わざるをえない。2つの自尊感情の相互作用により自己評価は維持され、自己愛や自尊心は安定するととらえるべきであろう。

更に和田 (2002) の指摘を念頭に置いた上で、自己愛と自尊心との関係を考えて、肯定的な社会評価を受け続け、自分を好ましく思いたい自己愛傾向は、どのような自己愛傾向要因であれ自尊感情との間に正の相関が存在する可能性が高い。この可能性について小塩 (1997) は、「とてもよい」自尊感情が、自己愛人格目録短縮版 (:以降 NPI-S) で抽出した「優越感・有能感」、「注目・賞賛欲求」、「自己主張性」全ての因子との間で、正の相関を示していることを実証した。そして、「NPI によって測定される自己愛傾向は、全体として「とてもよい」という完全性や優越性に関連する肯定的自尊感情とより強く関係する傾向があり、自己愛概念の定義に沿う結果である」と述べている。しかしながら後に、「また先行研究では、「注目・賞賛欲求」は自尊感情とは無相関であることが示されている (小塩, 1997, 1998a)」(小塩, 2002) と明記し、自己愛傾向要因の一部と自尊感情との間には相関が認められない、と結論付けている。

だが、自分で自分を愛する状態の自己愛が、他者に愛される自分を愛する状態に変化しているのであれば、自尊心が内包する2つの自尊感情と自己愛の関係は、以前にも増して強くなっているはずである。自己愛人格傾向尺度を用いて自己愛傾向を測定し、自己愛の変化を探ると共に、自己愛と自尊心との関連性を検討する必要があると考えられる。

目的と仮説

ここでは、和田 (2002) が述べた自己愛人格傾向の変化を確認するために、臨床心理学的見地から「自分の身体に対する自己満足、自信、耽溺によって満たされ、他者にアピールして賞賛を得る必要がない」と捉えられている「身体賞賛」因子が加わっている、小西他 (2006) の NPI-35を使用した。この NPI-35は、Raskin & Terry (1988) の NPI を邦訳したもので、上記の「身体賞賛」を含む「注目欲求」・「誇大感」・「主導性」・「自己確信」の5因子構造35項目から成っている。この尺度作成の過程において、小西他は NPI-S との関連性を検討し、NPI-35の「注目欲求」・「誇大感」・「主導性」と NPI-S 各下位尺度間全てに正の相関があることを明らかにしている。

実際に自己愛傾向の変化があるのであれば、この「身体賞賛」因子は成立しない可能性が考えられる。NPI-35の構造確認も踏まえたうえで、自己愛の根幹を成すとされる「身体賞賛」が成立するかどうかに注目したい。また成立しなければ、どのような自己愛傾向に「身体賞賛」が分類されるかについても含め、この点に関して検討を加える。その上で、自己愛傾向と2種類の自尊感情との関連性を実証的に研究することを目的とする。仮説は次の通りである。

- 仮説 1 今回使用する NPI-35の「注目欲求」因子を含めた5因子全てと肯定的自尊感情との間には、正の相関が存在する。
- 仮説 2 今回使用する NPI-35の「注目欲求」因子を含めた5因子全てと否定的自尊感情との間には、負の相関が存在する。
- 仮説 3 今回使用する NPI-35の「身体賞賛」因子は、独立因子として成立しない。

方法

1. 調査対象者

東京都内の私立大学学生133名に調査を行った [男子38名, 女子95名, 平均年齢21.3歳 (SD5.93)]

2. 手続き

2008年1月11日、大学の授業内において集団調査方式で実施し、時間内に回収した。

3. 質問紙の構成

(1) 自己愛人格傾向尺度 (NPI-35)

小西他 (2006) によって Raskin & Terry (1988) の NPI を邦訳して新たに作成された NPI-35を使用した。回答は「あてはまる (5点)」から「あてはまらない (1点)」までの5件法で求めた。

(2) 自尊感情尺度

小塩 (1997) と同様に、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度日本語版 (10項目; 安藤, 1987) と Cheek & Buss (1981) の作成した自尊感情尺度日本語版 (6項目; 大淵他訳, 1991) をあわせた尺度を使用した。小塩は、Rosenberg の自尊感情尺度を用いた先行研究で、2つ以上の因子が報告されていること (Carmines, & Ziller, 1979; 井上, 1992 等) を取り上げ、Carmines, & Ziller に従い、肯定的自尊感情と否定的自尊感情とに分け、これを因子名として使用している。またこの2つの自尊感情尺度間の相関は高く ($r = .64$ $p < .001$)、組み合わせて用いることは問題がないと述べている。小塩 (1997) は「あてはまる」、「あてはまらない」の2件法で回答させているが、本調査では「あてはまる (5点)」から「あてはまらない (1点)」の5件法で回答を求めた。

結果

1. 各尺度の分析結果

(1) 自己愛傾向

NPI-35の35項目の得点項目について、基本統計量を算出し、平均値、標準偏差、分布の偏りを検討したところ、6項目に床効果が見られた。しかしながら、このNPI-35の構造確認を行い「身体賞賛」因子の動きを見る目的から、全項目を使用することとした。自己愛人格傾向尺度NPI-35の構造確認のため、NPI-35の35項目について主因子法、Promax 回転による因子分析をおこなったところ、固有値の減衰状況や解釈可能性から5因子構造が妥当であると判断した。今回の分析では、NPI-35の「身体賞賛」因子が独立因子として成立するかどうか、更に成立しない場合、因子構成項目であるNo.114「自分の体を自慢したい」、No.117「自分の体を見るのが好きだ」、No.125「鏡で自分自身を見

Table 1 自己愛人格傾向質問項目および平均値と標準偏差

| 質問項目 | 最小値 | 最大値 | 平均値 | 標準偏差 | M + SD | M - SD |
|---------------------------|-----|-----|------|------|--------|--------|
| 101 人に影響を与える生まれつきの才能がある | 1 | 5 | 2.44 | 1.14 | 3.57 | 1.30 |
| 102 控えめな人間ではない | 1 | 5 | 3.08 | 1.07 | 4.16 | 2.01 |
| 103 どんなことでもあえて挑戦する | 1 | 5 | 2.93 | 1.05 | 3.98 | 1.88 |
| 104 私が世界のルールを作れば世界はよくなる | 1 | 5 | 2.98 | 1.19 | 4.18 | 1.79 |
| 105 自分のやり方でいつもうまく切り抜ける | 1 | 5 | 2.98 | 0.99 | 3.98 | 1.99 |
| 106 注目的になりたい | 1 | 5 | 2.96 | 1.16 | 4.12 | 1.80 |
| 107 私は成功するだろう | 1 | 5 | 3.12 | 0.94 | 4.06 | 2.18 |
| 108 私は特別な才能を持った人間だ | 1 | 5 | 2.38 | 1.15 | 3.54 | 1.23 |
| 109 よいリーダーである | 1 | 5 | 2.23 | 1.09 | 3.33 | 1.14 |
| 110 自己主張する | 1 | 5 | 3.30 | 1.07 | 4.37 | 2.23 |
| 111 周囲に影響を及ぼす権力を持ちたい | 1 | 5 | 2.84 | 1.23 | 4.07 | 1.61 |
| 112 思い通りに人を使うのは簡単だ | 1 | 5 | 2.10 | 0.96 | 3.06 | 1.14 |
| 113 ふさわしい尊重を受けることを強く求める | 1 | 5 | 2.60 | 1.13 | 3.73 | 1.47 |
| 114 自分の体を自慢したい | 1 | 5 | 1.68 | 0.86 | 2.55 | 0.82 |
| 115 決断には責任を持ちたい | 1 | 5 | 4.13 | 0.84 | 4.97 | 3.29 |
| 116 世間から見て抜きん出た人になりたい | 1 | 5 | 3.44 | 1.15 | 4.59 | 2.29 |
| 117 自分の体を見るのが好きだ | 1 | 5 | 1.92 | 1.04 | 2.97 | 0.88 |
| 118 チャンスがあれば自分をよく見せたい | 1 | 5 | 3.87 | 0.96 | 4.83 | 2.91 |
| 119 自分の行動は理解している | 1 | 5 | 3.41 | 0.99 | 4.41 | 2.42 |
| 120 物事をやり遂げるのに人には頼らない | 1 | 5 | 2.63 | 1.12 | 3.75 | 1.59 |
| 121 みんな私の話を聞きたがる | 1 | 5 | 2.50 | 0.91 | 3.41 | 1.59 |
| 122 欲しい物を入手するまで気がすまない | 1 | 5 | 3.05 | 1.28 | 4.33 | 1.77 |
| 123 ほめられたいと思う | 1 | 5 | 4.28 | 0.84 | 5.12 | 3.44 |
| 124 権力を持ちたい強い意志がある | 1 | 5 | 2.60 | 1.22 | 3.82 | 1.38 |
| 125 鏡で自分自身を見るのが好きだ | 1 | 5 | 2.32 | 1.15 | 3.47 | 1.17 |
| 126 注目的になって目立ちたい | 1 | 5 | 2.91 | 1.28 | 4.19 | 1.63 |
| 127 周囲は私の権威を認めているようだ | 1 | 5 | 1.73 | 0.82 | 2.55 | 0.91 |
| 128 集団の一員よりもリーダーになるのを好む | 1 | 5 | 2.14 | 1.00 | 3.14 | 1.14 |
| 129 将来偉大な人になるだろう | 1 | 5 | 2.02 | 1.02 | 3.04 | 1.00 |
| 130 どんなことでもみんなを信用させられる | 1 | 5 | 2.54 | 1.00 | 3.54 | 1.54 |
| 131 生来リーダーとしての素質がある | 1 | 5 | 1.96 | 0.99 | 2.95 | 0.97 |
| 132 いつか誰かに自伝を書いてもらいたい | 1 | 5 | 1.71 | 1.13 | 2.83 | 0.58 |
| 133 人前で自分に注意が払われないと落ち着かない | 1 | 5 | 2.58 | 1.28 | 3.86 | 1.30 |
| 134 ほかの人よりも有能だ | 1 | 5 | 2.31 | 1.13 | 3.44 | 1.18 |
| 135 周りの人々よりずば抜けた人間だ | 1 | 5 | 1.96 | 1.03 | 2.99 | 0.93 |

るのが好きだ」がどのような因子に吸収されるかを調べる目的があった。この目的を考慮し、この因子分析に限り因子負荷量.35以下の項目を削除し、複数の因子に高い負荷量を示す項目を削除したうえ、共通性を考慮にいれ因子分析を繰り返したところ、最終的に3項目が排除され、32項目5因子構造を得た。Table 1に質問項目と基本統計量、Table 2にPromax回転後の因子パターン、因子間相関、共通性、各因子の係数を示した。なお第1因子名「顕示的注目欲求」と第3因子名「誇大的優越感」は、Table 2のみ「注目欲求」「優越感」と表現する。

第1因子は11項目からなり、「周囲に影響を及ぼす権力を持ちたい」「権力を持ちたい強い意志がある」「注目的になって目立ちたい」を初めとして、「世間から見て抜き出ている」「チャンスがあれば自分をよく見せたい」などの項目に高い因子負荷が見られた。これを、他者に自分の存在を強く印象付け、他の人よりも目立つ形で注目されることを期待する傾向と解釈し、「顕示的注目欲求」因子と命名した。なお、身体賞賛に関する2項目 No.117「自分の体を見るのが好きだ」No.114「自分の体を自慢したい」は、第1因子に含まれた。第2因子は8項目からなり、「私は成功するだろう」「周りの人々よりもずばぬけた人間だ」「他の人よりも有能だ」「私は特別な才能を持った人間だ」などの項目に高い因子負荷が見られた。これを、自分が他者よりも優れた能力を有する人間で、未来は成功に満ちているといった感覚を抱く傾向と解釈し、「誇大感」因子と命名した。なお、身体賞賛に関する項目 No.125「鏡で自分自身を見るのが好きだ」は、この第2因子に含まれた。第3因子は「生来リーダーとしての素質がある」「集団の一員よりもリーダーになるのを好む」「よいリーダーである」などの項目に高い因子負荷が見られた。これを、人よりも上に立って尊重され、他者を操作できる立場になることを期待する傾向と解釈し、「誇大的優越感」因子と命名した。第4因子は4項目

Table 2 自己愛傾向尺度 NPI-35の因子分析結果 主因子法・Promax 回転

| | 注目欲求 | 誇大感 | 優越感 | 有能感 | 主張性 | 共通性 | | |
|---------------------------|------|------|------|------|------|-----|-----|-----|
| 111 周囲に影響を及ぼす権力を持ちたい | .80 | -.26 | .16 | .17 | .15 | .69 | .88 | |
| 124 権力を持ちたい強い意志がある | .76 | -.25 | .26 | .05 | -.05 | .65 | | |
| 126 注目的になって目立ちたい | .73 | .19 | -.02 | -.17 | .22 | .65 | | |
| 122 欲しい物を入手するまで気がすまない | .66 | -.06 | -.14 | .01 | .03 | .33 | | |
| 116 世間から見て抜き出た人になりたい | .65 | .19 | -.07 | .07 | .23 | .62 | | |
| 118 チャンスがあれば自分をよく見せたい | .63 | .04 | -.02 | .03 | .10 | .43 | | |
| 106 注目的になりたい | .62 | .18 | -.08 | -.07 | .27 | .51 | | |
| 123 ほめられたいと思う | .53 | .06 | -.09 | -.23 | .28 | .32 | | |
| 133 人前で自分に注意が払われないと落ち着かない | .45 | .17 | .04 | -.10 | -.11 | .31 | | |
| 117 自分の体を見るのが好きだ | .44 | .21 | -.14 | .21 | -.29 | .51 | | |
| 114 自分の体を自慢したい | .36 | .03 | .15 | .17 | -.32 | .45 | | |
| 107 私は成功するだろう | -.09 | .77 | -.17 | .18 | .18 | .58 | | .89 |
| 135 周りの人々よりもずばぬけた人間だ | .05 | .77 | .20 | -.18 | -.20 | .74 | | |
| 134 ほかの人も有能だ | .02 | .75 | .16 | -.02 | .05 | .72 | | |
| 108 私は特別な才能を持った人間だ | .07 | .70 | .11 | .01 | .02 | .66 | | |
| 129 将来偉大な人になるだろう | .10 | .65 | .01 | .05 | .12 | .55 | | |
| 101 人に影響を与える生まれつきの才能がある | -.08 | .57 | .23 | -.07 | .07 | .41 | | |
| 125 鏡で自分自身を見るのが好きだ | .33 | .47 | -.17 | -.02 | -.23 | .44 | | |
| 130 どんなことでもみんなを信用させられる | -.08 | .37 | .20 | .28 | .06 | .42 | | |
| 131 生来リーダーとしての素質がある | -.19 | .09 | .93 | -.02 | .06 | .79 | .84 | |
| 128 集団の一員よりもリーダーになるのを好む | .04 | -.14 | .79 | -.04 | .16 | .55 | | |
| 109 よいリーダーである | -.15 | .17 | .67 | .16 | .21 | .68 | | |
| 113 ふさわしい尊重を受けることを強く求める | .28 | .00 | .53 | -.11 | -.01 | .44 | | |
| 127 周囲は私の権威を認めているようだ | .14 | .11 | .52 | .05 | -.24 | .55 | | |
| 112 思い通りに人を使うのは簡単だ | -.07 | .24 | .44 | -.04 | -.09 | .31 | | |
| 121 みんな私の話を聞きたがる | .09 | .12 | .36 | -.06 | .07 | .21 | | |
| 119 自分の行動は理解している | .01 | -.17 | .04 | .58 | .19 | .31 | .61 | |
| 105 自分のやり方でいつもうまく切り抜ける | -.08 | .28 | -.10 | .57 | .22 | .46 | | |
| 120 物事をやり遂げるのに人には頼らない | -.12 | .16 | -.08 | .52 | -.15 | .32 | | |
| 104 私が世界のルールを作れば世界はよくなる | .18 | -.03 | .01 | .48 | -.02 | .31 | | |
| 110 自己主張する | .23 | .06 | .15 | .15 | .54 | .48 | .74 | |
| 102 控えめな人間ではない | .16 | .05 | .07 | .05 | .52 | .33 | | |
| 因子間相関 | | .60 | .50 | .32 | .36 | | .93 | |
| | | | .62 | .45 | .30 | | | |
| | | | | .36 | .33 | | | |
| | | | | | .18 | | | |

からなり、「自分の行動は理解している」「自分のやり方でいつも切り抜かれる」「物事をやり遂げるのに人には頼らない」「私が世界のルールを作れば世界はよくなる」に高い因子負荷が見られた。これを、自分の能力を確信し、それゆえ自分の行動に自信と満足感を持っている傾向と解釈し、「有能感」因子と命名した。第5因子は「自己主張する」「控えめな人間ではない」の2項目に高い因子負荷が見られた。これを自分の意見や考えをはっきりと表出する傾向と解釈し、「主張性」因子と命名した。しかしながら第5因子の「主張性」については、項目数が2項目と少ないことから、今回は下位尺度として扱うことを控えた。

また、内的整合性検討のために求めた各下位尺度の係数は、尺度全体で $= .93$ 、「顕示的注目欲求」では $= .88$ 、「誇大感」では $= .89$ 、「誇大的優越感」では $= .84$ 、「有能感」では $= .61$ であった。「有能感」については十分な値ではなかったが項目数を考慮するならば妥当であり、全体として内的整合性は示されたものと判断した。

次に、各下位尺度得点の合計得点の平均値を算出すると共に、下位尺度間の相関と平均値、標準偏差を Table 3 に示した。

今回の因子分析の結果、NPI-35の因子構造を確認するには至らなかった。また因子構造の内容から、小西他(2006)が他者評価の影響しない重要な自己愛人格傾向とみなした、自分の身体に対する自信や耽溺を示す「身体賞賛」因子は抽出されず、因子を構成する3項目は、「顕示的注目欲求」と「誇大感」に吸収された。この結果から、仮説3は証明された。

小西他(2006)のNPI-35の「注目欲求」因子と今回の「顕示的注目欲求因子」、小西他(2006)の「誇大感」因子と今回の「誇大感」因子では、下位尺度を構成する項目内容はほぼ一致した。しかし、小西他(2006)の「主導性」因子と今回の「誇大的優越感」因子との間では、異なる傾向が示された。「主導性」因子は、下位尺度としての使用を控えた第5因子「主張性」因子の2項目「自己主張する」「控えめな人間ではない」や、因子負荷が非常に低いため削除した「どんなことでもあえて挑戦する」を含む、自分の意見や考えを全面的にはっきりと表出したり挑戦したりする積極的な態度を示す項目で構成されている。これに対し「誇大的優越感」因子は、積極的な態度を示すというよりは、人の上に立つことや、他者を意のままに動かすことへの期待を示す項目によって構成された。そして小西他(2006)の「自己確信」因子と今回の「有能感」因子は、似かよった項目で構成された。しかし「自己確信」因子には、今回因子負荷が非常に低いため削除した「決断には責任を持ちたいと思う」という項目が含まれており、自分自身を肯定的、確信的に捉える傾向がうかがえる。対する「有能感」因子も自分自身を肯定的、確信的には捉えているが、「世界のルールを作れるならば、もっと世界はよくなるだろう」といった、自分の有能性をより強く確信する傾向がうかがえた。

(2) 自尊感情

自尊感情16項目について、基本統計量を算出し、平均値、標準偏差、分布の偏りを検討したところ、5項目に床効果が見られた。しかしながら、自尊心の2側面をとらえる目的からすべての項目を使用することとした。この16項目について主因子法、Promax回転による因子分析をおこなった結果、因子負荷の低い1項目と両因子に高く負荷している1項目を削除し、14項目2因子構造を得た。この因子は、否定的な項目群からなる因子と肯定的な項目群からなる因子に分かれた。Table 4に質問項目と基本統計量、Table 5にPromax回転後の因子パターン、因子間相関、共通性、Cronbachの係数を示している。

第1因子は8項目からなり、「自分を役立たずな人間と感ずることが時々ある」「自分はダメな人間だと思うことが時々

Table 3 自己愛傾向各下位尺度間の相関係数・平均値・標準偏差

| | 顕示的注目欲求 | 誇大感 | 誇大的優越感 | 有能感 | 平均 | SD |
|---------|---------|-------|--------|-------|------|-----|
| 顕示的注目欲求 | | .60** | .50** | .32** | 2.92 | .76 |
| 誇大感 | | | .62** | .45** | 2.39 | .80 |
| 誇大的優越感 | | | | .36** | 2.18 | .70 |
| 有能感 | | | | | 3.00 | .73 |

** $p < .01$ * $p < .05$

Table 4 自尊感情の質問項目および平均値と標準偏差

| 質問項目 | 最小値 | 最大値 | 平均値 | 標準偏差 | 平均 + SD | 平均 - SD |
|------------------------------|-----|-----|------|------|---------|---------|
| 201 少なくとも他の人と同程度の価値のある人間である | 1 | 5 | 3.78 | 1.13 | 4.91 | 2.65 |
| 202 私はだめな人間だと思う | 1 | 5 | 2.96 | 1.32 | 4.28 | 1.64 |
| 203 自分にはたくさんの長所があると思う | 1 | 5 | 3.24 | 1.03 | 4.27 | 2.21 |
| 204 別の人間に生まれ変われたらよいのにと、よく思う | 1 | 5 | 2.90 | 1.38 | 4.28 | 1.52 |
| 205 自分を失敗者だと感じるが多い | 1 | 5 | 2.88 | 1.31 | 4.19 | 1.57 |
| 206 私の人生はすべてうまくいっていない | 1 | 5 | 2.33 | 1.11 | 3.44 | 1.22 |
| 207 何をしてもたいていの人と同じ程度にはうまくできる | 1 | 5 | 3.56 | 1.06 | 4.63 | 2.50 |
| 208 私はもっと自分を高めたいと思っている | 1 | 5 | 4.47 | 0.71 | 5.19 | 3.76 |
| 209 私には自慢できるようなものはほとんどない | 1 | 5 | 3.05 | 1.15 | 4.20 | 1.90 |
| 210 私の人生は失敗である | 1 | 5 | 2.17 | 1.17 | 3.33 | 1.00 |
| 211 自分を好ましい人間だと思っている | 1 | 5 | 3.16 | 1.06 | 4.22 | 2.10 |
| 212 自分の価値を信じている | 1 | 5 | 3.65 | 1.09 | 4.75 | 2.56 |
| 213 自分に大体満足している | 1 | 5 | 2.86 | 1.30 | 4.17 | 1.56 |
| 214 自分をもっと尊敬できたらと思う | 1 | 5 | 3.88 | 1.02 | 4.90 | 2.86 |
| 215 自分が役立たずな人間だと感じる事が時々ある | 1 | 5 | 3.43 | 1.21 | 4.64 | 2.22 |
| 216 自分はだめな人間だと思う事が時々ある | 1 | 5 | 3.58 | 1.21 | 4.79 | 2.37 |

は逆転項目

Table 5 自尊感情尺度の因子分析結果 主因子法・Promax 回転

| | 否定的自尊 | 肯定的自尊 | 平均 | SD | 共通性 |
|------------------------------|-------|-------|------|------|-----|
| 215 自分が役立たずな人間だと感じる事が時々ある | .87 | .07 | 3.43 | 1.21 | .70 |
| 216 自分はだめな人間だと思う事が時々ある | .86 | .13 | 3.58 | 1.21 | .64 |
| 205 自分を失敗者だと感じる事が多い | .85 | .07 | 2.88 | 1.31 | .66 |
| 202 私はだめな人間だと思う | .78 | -.09 | 2.96 | 1.32 | .68 |
| 210 私の人生は失敗である | .62 | -.10 | 2.17 | 1.17 | .46 |
| 206 私の人生はすべてうまくいっていない | .61 | -.16 | 2.33 | 1.11 | .50 |
| 204 別の人間に生まれ変われたらよいのにと、よく思う | .51 | -.01 | 2.90 | 1.38 | .26 |
| 209 私には自慢できるようなものはほとんどない | .47 | -.32 | 3.05 | 1.15 | .49 |
| 212 自分の価値を信じている | -.15 | .72 | 3.65 | 1.09 | .66 |
| 201 少なくとも他の人と同程度の価値のある人間である | -.10 | .67 | 3.78 | 1.13 | .53 |
| 203 自分にはたくさんの長所があると思う | -.39 | .48 | 3.24 | 1.03 | .26 |
| 208 私はもっと自分を高めたいと思っている | .18 | .47 | 4.47 | 0.71 | .16 |
| 207 何をしてもたいていの人と同じ程度にはうまくできる | -.12 | .46 | 3.56 | 1.06 | .29 |
| 211 自分を好ましい人間だと思っている | -.31 | .46 | 3.16 | 1.06 | .45 |
| 因子間相関 | | -.62 | | | |

ある」など、自分を否定的にとらえる内容の項目に高い負荷を示したことから、「否定的自尊感情」因子と命名した。第2因子は6項目からなり、「自分の価値を信じている」「少なくとも他の人と同程度の価値のある人間である」など、自分を肯定的にとらえる内容の項目に高い負荷を示したことから、「肯定的自尊感情」因子と命名した。また内的整合性検討のため求めた Cronbach の係数は、「否定的自尊感情」では $= .90$ 、「肯定的自尊感情」では $= .81$ と十分な値を得た。

次に、両下位尺度得点の合計得点の平均値を算出すると共に、下位尺度間の相関と平均値、標準偏差を Table 6 に示した。

因子分析の結果、「否定的自尊感情」においては、「自分が役立たずな人間」「だめな人間」と時々感じたり、「自慢で

Table 6 自尊感情下位尺度間の相関係数・平均・標準偏差

| | 否定的自尊 | 肯定的自尊 | 平均 | SD |
|-------|-------|--------|------|-----|
| 否定的自尊 | | -.62** | 3.65 | .73 |
| 肯定的自尊 | | | 2.91 | .94 |

** $p < .01$ * $p < .05$

きるようなものはほとんどない」「別の人間に生まれ変わったら」と思うなど、自己評価を低くとらえる傾向が示された。対する「肯定的自尊感情」では、因子構成項目全てにおいて平均が高かった。「少なくとも他の人と同程度の価値のある人間である」と確信し、その価値も含めて「もっと自分を高めたい」ととらえる、自己評価の高さが示された。

2. 自己愛人格傾向と自尊感情との関係

ここでは、自己愛人格傾向と自尊感情の関係を検討する目的で、下位尺度得点を加算し項目数で割った平均得点を下位尺度得点としたうえ、各尺度間の Pearson の相関係数を求めた。結果は Table 7 に示した通りである。

「顕示的注目欲求」では、肯定的自尊感情との間に弱い正の相関 ($r = .32, p < .01$) を示したものの、否定的自尊感情との間に有意な差は得られなかった。次に、「誇大感」では、肯定的自尊感情との間に中程度の正の相関 ($r = .51, p < .01$)、否定的自尊感情との間に弱い負の相関 ($r = -.34, p < .01$) を示した。また「誇大的優越感」では肯定的自尊感情との間に弱い正の相関 ($r = .38, p < .01$)、否定的自尊感情との間に弱い負の相関 ($r = -.23, p < .01$) を示した。そして「有能感」では、肯定的自尊感情との間に弱い正の相関 ($r = .38, p < .01$)、否定的自尊感情との間に弱い負の相関 ($r = -.28, p < .01$) を示した。この結果から、「顕示的注目欲求」、「誇大感」、「誇大的優越感」、「有能感」と肯定的自尊感情との間に正の相関のあることが明らかとなり、仮説 1 は証明された。また「顕示的注目欲求」と否定的自尊感情との間に有意な差は得られなかったが、「誇大感」、「誇大的優越感」、「有能感」については否定的自尊感情との間に負の相関があることが明らかになった。このことから、「顕示的注目欲求」を除く「誇大感」、「誇大的優越感」、「有能感」において、仮説 2 は証明された。

次に、自己愛傾向の高い人、低い人の中での自尊感情傾向を比較するために、自己愛傾向の下位尺度得点を高・中・低 3 群に分け、このうちの高群、低群と各尺度間の t 検定を行なった。結果は Table 8 に示したとおりである。

「顕示的注目欲求」では、肯定的自尊感情 ($t(93) = 2.46, p < .05$) との間に有意な差が見られ、顕示的注目欲求高群ほど肯定的自尊感情の強さが伺えた。「誇大感」においては、肯定的自尊感情 ($t(93) = 5.25, p < .001$)、否定的自尊感情 ($t(93) = 3.34, p < .01$) との間に有意な差が見られた。誇大感高群ほど肯定的自尊感情が強く、否定的自尊感情

Table 7 自己愛人格傾向下位尺度と自尊感情下位尺度との相関関係

| | 肯定的自尊 | 否定的自尊 |
|---------|-------|--------|
| 顕示的注目欲求 | .32** | .00 |
| 誇大感 | .51** | -.34** |
| 誇大的優越感 | .38** | -.23** |
| 有能感 | .38** | -.28** |

** $p < .01$ * $p < .05$

Table 8 自尊感情高低群別 t 検定結果

| | M | SD | M | SD | t 値 | |
|-----------|-------------|------|-------------|------|------|-----|
| (顕示的注目欲求) | 高群 (N = 45) | | 低群 (N = 50) | | | |
| 肯定的自尊感情 | 3.86 | 0.65 | 3.49 | 0.81 | 2.46 | * |
| 否定的自尊感情 | 2.98 | 0.97 | 2.81 | 1.01 | 0.82 | |
| (誇大感) | 高群 (N = 44) | | 低群 (N = 51) | | | |
| 肯定的自尊感情 | 3.99 | 0.60 | 3.23 | 0.79 | 5.25 | *** |
| 否定的自尊感情 | 2.65 | 0.93 | 3.30 | 0.95 | 3.34 | ** |
| (誇大的優越感) | 高群 (N = 43) | | 低群 (N = 37) | | | |
| 肯定的自尊感情 | 3.88 | 0.64 | 3.23 | 0.83 | 3.95 | *** |
| 否定的自尊感情 | 2.72 | 0.91 | 3.20 | 0.90 | 2.35 | * |
| (有能感) | 高群 (N = 40) | | 低群 (N = 65) | | | |
| 肯定的自尊感情 | 3.98 | 0.56 | 3.46 | 0.78 | 3.68 | *** |
| 否定的自尊感情 | 2.60 | 1.08 | 3.00 | 0.89 | 2.07 | * |

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

は低いことが示された。「誇大的優越感」では、肯定的自尊感情 ($t(78) = 3.95, p < .001$)、否定的自尊感情 ($t(78) = 2.35, p < .05$) との間に有意な差が見られた。「誇大的優越感」においても「誇大感」と同様、高群ほど肯定的自尊感情が強く、否定的自尊感情は低いことが示された。更に「有能感」においても、肯定的自尊感情 ($t(103) = 3.68, p < .001$)、否定的自尊感情 ($t(103) = 2.07, p < .05$) との間に有意な差が見られ、高群ほど肯定的自尊感情が強く、否定的自尊感情は低いことが示された。

考 察

本研究の目的は、自己愛人格傾向尺度 NPI-35を使用してその因子構造を確認すると同時に、自己愛傾向の全ての要因と肯定的自尊感情、否定的自尊感情との関連性を検討することであった。因子分析の結果、「顕示的注目欲求」「誇大感」「誇大的優越感」「有能感」「主張性」の5因子が見出され、NPI-35の構造を確認することはできなかった。また NPI-35において、臨床心理学的見地からみて重要な自己愛傾向の根幹を成すと捉えられている「身体賞賛」因子は抽出されず、仮説3は証明された。更に「身体賞賛」因子を構成する3項目が「顕示的注目欲求」と「誇大感」因子に吸収されたことから、青年期の大学生にとっての「身体」は、他者に注目され、肯定的評価を受けることで自己価値を高めることのできる表現体であり、自己満足するだけの対象ではないことが明らかになった。しかし、「身体賞賛」因子に関する3項目のうち「自分の体を自慢したい」「自分の体を見るのが好きである」という文面を、調査対象者である大学生がどのように受け取ったかについては疑問が残る。文章から受ける印象やイメージによって、今回の結果が左右された可能性は否定できない。

本研究で得られた自己愛人格傾向各下位尺度は、自分の存在を強く印象付け、他の人よりも目立って注目されることを期待する傾向の「顕示的注目欲求」因子、自分が他者よりも優れた能力を有する人間で、未来は成功に満ちているといった感覚を抱く傾向の「誇大感」因子、人よりも上に立って尊重され、他者を操作できる立場になることを期待する傾向の「誇大的優越感」因子、自分の能力を確信し、それゆえ自分の行動に自信と満足感を持っている傾向の「有能感」因子、積極的に主張する「主張性」因子であった。なお「主張性」因子は項目数が2項目と少なかったため、使用を控えた。今回の因子分析では、設問35項目のうち、「どんなことでもあえて挑戦する」「決断には責任を持ちたいと思う」の2項目が因子負荷量と共通性の低さから削除され、第5因子「主張性」も使用を控えたことから、自分の考えや意見を主張する積極的な態度や、責任を引き受ける態度は、下位尺度に反映されなかった。結果として、今回得られた自己愛人格傾向は、困難なことに挑戦し責任を引き受けるより、他者との比較の中で目立って注目され、人並み以上に有能であることを肯定されることで自己価値を確信し、自己評価を維持しようとする欲求の強さが伺えるものであった。次に、この自己愛傾向と深い関係性のある自尊感情について因子分析を行なった結果、自己評価が高く自分に自信を持っている「肯定的自尊感情」因子と、自己評価が低く自分に自信の持てない「否定的自尊感情」因子が見出された。この2種類の自尊感情のうち、「肯定的自尊感情」については、自己愛人格傾向要因である「顕示的注目欲求」・「誇大感」・「誇大的優越感」・「有能感」全てと正の相関があることが確認され、よって仮説1は証明された。また「否定的自尊感情」については、「顕示的注目欲求」を除く「誇大感」・「誇大的優越感」・「有能感」との間に負の相関があることが確認された。よって仮説2は、「顕示的注目欲求」を除く他の自己愛傾向要因において証明された。

この結果から、「誇大感」・「誇大的優越感」・「有能感」においては、他者比較の中で自分のほうがより優れていると思ひ、またそのように他者からも評価されたいという傾向と、自分のネガティブな側面を自己否定しポジティブにとらえていこうとする、肯定的自己受容傾向を有していることが明らかになった。また「顕示的注目欲求」については、他の3因子に比べて、他者比較の中で自分のほうがより優れていることを他者から評価してもらいたいという傾向が、非常に強いことが示された。しかし、肯定的自己評価よりも肯定的他者評価による自己評価維持の傾向が強い結果、自分のネガティブな側面を自己否定し、自分をポジティブにとらえていこうとする肯定的自己受容傾向は低いことが示された。これは先行研究(小塩, 1997, 1998a)において「注目・賞賛欲求」因子が自尊感情とは無相関であると述べた小塩(2002)の結果とは異なるものとなった。自己愛と関係の深い自尊心において、Rosenbergは完全性と優越性を含まない自己受容としての「これでよい」自尊感情を自尊心と定義した。しかし、自尊心と特に強く関わる自己評価と結びついている自己愛は、「とてもよい」「これでよい」2側面の自尊感情間で相関を示しており、Rosenbergの定義に

よる一方の自尊感情だけでは、自己愛の成長には不備であることも明らかになったと言えよう。

今回の検証によって、自己愛が「自分で自分を愛する状態」から「人に愛されている自分を愛する状態」へと移行し、常に肯定的評価を与えてくれる他者の存在を意識していることが明らかになった。確実に、和田 (2002) が述べた「自分で自分を愛するより人に愛されたい状態」への変化が起こっていると言えるであろう。また、自己愛が Rosenberg (1965) の示した2種類の自尊感情を有し、特に「とても良い (very good)」自尊感情が強いことが示された。これは、優越感と完全性を含んだ社会からの肯定的評価を望む傾向が高いことを示している。しかし、自己愛が肯定的他者評価による過度な自己評価に向かおうとする時、自尊感情がこれを抑制するか促進するかについては不明である。また、社会的基準と自分内基準との間で自己に対する評価が異なった場合、自分なりの基準を中心にしたほうが自己批判を強めずに済むことから (加藤, 1977)、自己評価維持のために自己内基準の「これでよい (good enough)」自尊感情に固執し、自己の正当性をはかる可能性も否定できない。自己愛と自尊感情2側面との関連について、より詳細な研究が期待されるものである。

引用文献

- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千尋編 (1992). セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- 遠藤由美 (1992). 第5章 個性化された評価基準からの自尊感情再考 セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千尋編 ナカニシヤ出版
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York : International University Press.
- (コフォート, H. 水野信義・笠原 嘉 (監訳) (1994). 自己の分析 みすず書房)
- Kohut, H. (1984). *How Does Analysis Cure ?* Chicago : University of Chicago Press.
- (コフォート, H. 本城秀次・笠原 嘉 (監訳) (1995). 自己の治癒 みすず書房)
- 小西瑞穂・大川匡子・橋本 幸 (2006). 自己愛人格傾向尺度 (NPI-35) の作成の試み パーソナリティ研究, 14(2), 214-226.
- 宮下一博・上地雄一郎 (1985). 青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向に関する実証的研究(1) 総合保健科学 1, 51-61.
- 中村 晃 (2004). 健全な自己愛と不健全な自己愛 千葉商科大学 (心理学) 紀要, 142(1), 1-20.
- 岡野憲一郎 (1999). 恥と自己愛の精神分析 対人恐怖から差別論まで 岩崎学術出版
- 小此木啓吾 (1992). 自己愛人間 現代ナルシズム論 ちくま学芸文庫
- 大淵憲一・堀毛一也編 (1998). パーソナリティと対人行動 誠信書房
- 大淵憲一 (2003). 満たされない自己愛 ちくま新書
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987). ナルシズム的人格の基礎的研究(1) ナルシズム的人格目録の信頼性と妥当性について 日本教育心理学会代29回総会発表論文集 534-535.
- 小塩真司 (1997). 自己愛傾向に関する基礎的研究 自尊感情, 社会的望ましさととの関連 名古屋大学教育学部紀要 (心理学) 44, 155-163.
- 小塩真司 (1998a). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み - 対人関係と適応, 友人によるイメージ評定から見た特徴 教育心理学研究, 50, 261-270.
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54 (5), 890-902.
- 佐方哲彦 (1986). 自己愛人格の心理測定 自己愛人格目録 (NPI) の開発 和歌山県立医科大学心理学過程紀要 16, 77-86.
- 和田秀樹 (2002). 自己愛と依存の精神分析 PHP 新書
- Western, D. (1990). The relation among narcissism, egocentrism, self-concept, and self-esteem : Experimental, clinical, and theoretical considerations. *Psychoanalysis and Contemporary Thought*, 13, 183-239.